

子宮蓄膿症

子宮内に血液や膿のような分泌物が貯留することによって元気消失、発熱、食欲不振、多飲多尿、吐き気、外陰部の腫大などの症状がみられる疾患です。

一般に開放性と非開放性と呼ばれる状態が存在し、開放性では子宮に貯まった内容物が膣より分泌されるため、おりものが多いなど飼い主さんが異常に気づくこともあるようです。非開放性では内容物が外陰部に観察されることがなく、症状が悪化することがあるようです。放置すると子宮が破裂し、生命にかかわることもある疾患です。

犬においては6歳以上の未避妊の雌犬で、発情後1～2ヶ月の黄体期に発生しやすく、交配の有無とは関係ありません。また、未経産犬、長く繁殖をしていない経産犬に見られることが多いとされています。発情抑制のために合成黄体ホルモン投与を行った例、後交配後の着床阻止目的のエストロゲン投与を行った例において発症が見られることもあります。まれに卵巣腫瘍や顆粒膜細胞腫に併発して発症することもあります。

猫における子宮蓄膿症は年齢的には弱齢でも発症することがあり、出産経験の有無は発症には関係ありません。また、大部分が開放性で膿液の貯留が比較的少ないため、重篤になる例が少ないようです。しかし、非開放性で貯留する膿液の量が多い場合は犬の場合と同様に早期の子宮摘出術が勧められます。

<原因>

性周期に伴うホルモンの変化により、子宮への分泌物の増大、貯留が起こり、ここに大腸菌などの細菌感染が起こることによって子宮腔への膿液の貯留が起こります。

<診断>

食欲不振、多飲多尿、嘔吐、腹部膨満、外陰部の腫大、陰部からの膿様物の排出などの臨床症状

血液検査 白血球数の増加（著しい好中球の左方移動）

血中尿素窒素（BUN）の上昇

X線検査、超音波検査において子宮の中に液体の貯留病変があることを確認します。

<治療>

症状がとても軽度な場合は内科的な治療を施すこともありますが、第一選択肢は外科手術による子宮、卵巣の摘出になります。犬、猫ともに治療が遅れると子宮が破裂、貯留液が腹腔内に流出して、腹膜炎を起こすことがあり、命に関わる危険があります。早期発見、早期治療が重要な疾患です。